日本統計学会会報

NO.109／2001. 10.20

発行――日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任―小西貞則(理事長), 土屋隆裕(庶務理事)
瀬尾 隆(広報理事), 山口和範(広報理事)
振替口座―00190-2-61361
銀行口座―第一勧業銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1．巻頭随筆「統計学の未来を磐石にするには」 ……村上征勝…1
2．第6回日本統計学会賞
2.1 第6回日本統計学会賞 ……2
2.2 受賞者のことば： ……畠中道雄…3
3．新名誉会員の紹介 ……4
4．研究部会新設公募のお知らせ ……4
5．日本統計学会小川研究奨励賞 ……5
5.1 小川研究奨励賞の報告 ……杉山高一…5
5.2 対象論文および受賞者の紹介 ……竹村彰通…5
5.3 小川研究奨励賞を受賞して ……紙屋英彦…5
6．第69回日本統計学会大会（福岡大会）
－大会企画担当理事報告－ ……岩崎学他…6
7．第70回大会のお知らせ ……広津千尋他…7
8．シリーズ：「フリーな統計システムRの話」 ……間瀬 茂…7
9．シリーズ：「Environmetrics，四方山話」 ……大瀧 慈…9
10．国際統計協会（ISI）第53回大会に出席して ……三浦由己…11
11．統計教育委員会報告 ……村上征勝…13
12．2000・2001年度第3回評議員会議事録 ……14
13．第69回日本統計学会総会 ……15
13.1 2001年度（第69回）総会報告 ……15
13.2 2000年度事業報告（2000.4.1～2001.3.31）……16
13.3 2001年度事業計画（2001.4.1～2002.3.31）……16
13.4 会則改正案 ……17
14．理事会報告 ……20
14.1 2000・2001年度第3回理事会議事録 ……20
14.2 2000・2001年度第4回理事会議事録 ……21
15．修士論文・博士論文の紹介 ……21
16．会合案内 ……21
17．事務局から ……23

巻頭随筆

1 統計学の未来を磐石にするには

村上 征勝（統計数理研究所）

膨大な情報が日常生活の中に溢れている。未来社会学者アルビン・トフラーは，世界は第一の波（農業社会），第二の波（工業社会）に続く第三の波（知識・情報社会）へと移行しつつあると説く。そして，この大きな波に乗り遅れまいと，日本でもIT革命や情報処理教育の必要性が声高に叫ばれている。データを扱う統計学の重要性はますます高まり，統計家が活躍する機会も増えるのではないかという期待もある。もしそうなら，統計学の未来はバラ色のように思えるが，果たして統計学の未来は明るいのだろうか。

前号所掲の浅野長一郎先生の巻頭言を初めとして，多くの研究者が会報で統計学の未来に対する不安を述べている。本学会の統計教育委員会が実施した「大学における統計教育の実態調査」の結果を見ても，昨今の情報処理教育重視の流れは，決して大学の統計教育者にとって追い風にはなっていない。情報という名を冠した学部や学科が新設され，そして情報という名を冠した講義科目が増えても，大学に情報学の研究者は増えこそすれ，統計学の研究者は増えてはいない。情報処理教育はプログラミング教育を初めとした計算機の活用法に重点が置かれ，データの科学的な分析法を教える統計学には実はさほど重点は置かれていない。

更に，社会の諸分野のユーザからも，かつての社会調査，品質管理に見られたような統計手法に対する熱烈な要望や支持があるようには思えない。時とともにユーザの要望は変る。今，統計学のユーザは何を求めているのか，我々は適確に把握しているのだろうか。実学である統計学がユーザの支持を失ったらどうなるのか。

と，大上段に構えて問題提起はしてみたものの，ではどうするのかと問われると答えに窮する。しかし，名案なぞあれば，すでに実行されているはずであると自らを慰め，乏しい経験から得たことを述べさせていただく。

二十数年前，日蓮遺文の真贋判定のための文章の統計分析を始めて以来，「源氏物語」等の文章分析に加えて，考古学データの統計分析，絵画の統計分析と少しずつ分析対象を増やしながら，統計学の応用領域の開拓を試みてきた。この研究を通じて得たことは多い。

まず先例の少ないデータ分析を試みる際の常として，試行錯誤が多く，すぐには論文化し難い。その意味で成果がすぐに要求される今日の社会の中では，新たな応用領域の開拓は取り組み難いといえる。しかし，統計学の礎を磐石なものとするには，いろいろな研究・応用のベクトルがあった方がよい。他の学問はどうであれ，統計学においては長期的な視野で評価できる環境を作るべきである。そうすれば，いろいろな研究・応用のベクトルがおのずと生まれよう。

ただ，新たな領域を開拓する場合，統計家がリーダシップを取る必要がある。もともと統計学は縁の下の力持ち的存在である。他の学問分野との共同研究ですばらしい成果が出ても，統計学自体が注目されることは少ない。今後統計学が注目されるためには，問題が持ち込まれるのを待っていては不十分で，統計家が積極的に問題を見つけ出し，研究のリーダシップをとるよう努力する必要がある。

また，統計分析の結果を広く理解してもらうには，できるだけ単純な方法で問題を解くことを心がけるべきである。複雑な手法を用いると，門外漢の人には分析の部分がブラック・ボックスになってしまい，分析結果の意味が理解され難い。単純な方法でよい成果を得るには，うまいデータを作る必要がある。私自身はデータは得るものではなく，作るものであると考えている。今日の重要なキーワードの一つであるデータ・マイニングは，すでに得られているデータ（変数）の中から有効な情報を引き出すことと一般に理解されているようである。しかし，実はそうではなく，必要な情報を引き出すことができるようなデータ（変数）を作り出すことではないかと日頃思っている。現実の多くの問題では，データ（変数）は無限であり，問題解決のためにどのようなデータ（変数）を作るかを見出すことこそが，実は統計分析で一番重要なのではないかという気がしている。

ところで，新しい領域の開拓の過程では，統計学の領域のみにとどまっていては決して知りえない他の分野の人間的な魅力にあふれた人々を知ることができる。これは，研究面とはまた違った大きな喜びである。このような喜びを得ることができるのは，統計家の特権ではないだろうか。データの無い領域でもデータを作れば，どのような領域の研究者とも共同研究が可能となる。いろいろな方向のベクトルを作れば人の輪が広がり，人生が豊かになり，統計学の未来が磐石となると考えるのはあまりにも楽観的であろうか。

2　第6回日本統計学会賞

2.1　第6回日本統計学会賞（2001年度）

「日本統計学会賞」の第6回受賞者は，畠中道雄（大阪大学名誉教授）会員に決定しました。受賞者には，西南学院大学で開催された日本統計学会第69回大会において，杉山高一会長から賞状と副賞の時計が贈呈されました。受賞されました畠中道雄会員の受賞理由と略歴，業績は以下の通りです。

受賞者：畠中道雄氏

略歴：1926年生，東京大学経済学部卒業，1966年大阪大学社会経済研究所教授，1980年大阪大学経済学部教授，1989年帝塚山大学経済学部教授。
現在　法政大学客員教授，大阪大学名誉教授。

受賞理由：多年にわたり統計学・計量経済学の理論と応用の研究に従事し，大きな貢献をした。特に時系列的相関構造を持つ計量経済モデルに対する推定方法の開発，識別問題の解明に寄与した。

業績：Time Series-Based Econometrics, Oxford University Press,（1996）"An efficient two-stage estimator for the dynamic adjustment model with autocorrelated errors", Journal of Econometrics. Vol.2, pp.199-220,（1974）

2.2　受賞者のことば

畠中　道雄

統計学になんの貢献も無い私が，日本統計学会賞をいただき，恥ずかしくもあり，光栄にも思います。賞状には，受賞理由の重要な部分が，時系列分析の手法を用いて，系列相関をとりこんだエコノメトリクス・モデルの識別および推定の問題を研究したこと，と記されています。たしかに私が1970年代に発表した２編の論文はそのような研究であって，当時は少しは注目を受けました。しかし時系列分析とエコノメトリクスというテーマは，その後，和分のオーダーが０でなく１という場合について飛躍的な発展を実現しました。その結果，私が書いた論文は，否定はされないもののその意義が薄れ，今は忘れ去られています。また忘れられて当然，とも思っています．これが，私が，今回の受賞を恥ずかしく思う理由です。

私は，30代なかばまでは主に経済学を勉強していて，統計学を知りませんでした。1959年，プリンストン大学のある研究所で実証研究をしていたとき，統計学のTukey教授から，"経済の時系列データにしぼったセミナーを開くから来い"，と云われました。経済学を勉強している者の中には私以外に参加者は無く，私がデータを揃えたり，先生の指示された計算を実行しました。こうして統計学がいかにデータの解釈に役立つかを，経験的に，教えていただきました。セミナーには統計学を勉強していた若者が数人参加していましたが，その一人が，後にエコノメトリクスで共和分の理論を展開して有名になった，Granger教授です。

私は，Tukey先生からは統計理論を教わりませんでした。私の統計学の学習の過程を紹介しましょう。1960年代，タイトルの中にeconometric methodsを含んだ本が次々と出版され，後のものほど内容が高級になりました。これらを，標準的な統計学の本（Kendall and Stuart, Andersonのmultivariateの本等）と平行して読みました。しかしeconometric methodsの本で，最後まで欠落していたのが，時系列分析と，高級の検定理論でした(後者の欠落は何故か分りません)。時系列分析では，1970年，Anderson, Box and Jenkins, Hannanの，性格・内容を異にする３冊の大著がほぼ同時に出版されました。私はいずれもできるだけ丁寧に勉強しました。また，丘本先生，赤池先生，竹内啓先生，佐和先生から刺激を受けました。丘本先生は，大阪大学基礎工学部大学院で，数学的に厳密な授業をしておられたので，傍聴させていただきました。冒頭に述べた２編の私の論文は，このような環境の中で作られました。いずれも作るのにたいした時間はかかっていません。

この1970年代，時系列—エコノメトリクスの分野にいた者は，日本では私ひとりだけでした。米国ではSims教授が，時系列分析をそれまでのエコノメトリクスに対抗するものと解釈して，戦いを挑んでいました。ここではこの論争の評価をさけますが，事実として，この分野の研究者が増えていきました。1980年頃からは日本でも研究者が増えました。別に私が教えた訳ではありません。若い者は，学界の動きを感じとったのでしょう。今

日，日本，米国，欧州諸国で，時系列—エコノメトリクスは，エコノメトリクスの重要な一分野として認知され，扱うモデルも多様化しています。

私は1980年代以降も，主にマクロ経済時系列の分析を続けています。ただし私より一世代若い人から啓発を受けて研究を進めるようになりました。日本のマクロ時系列データでは確定的トレンドの構造変化が他の先進国より顕著ですが，このことが時系列分析に与える影響の深さを私が認識したのは，彼らの一人の報告をきいてでした。ここ数年間，私は，構造変化をもった諸変数の確定的トレンドの間にいくつの関係式があるかを，データから定めるという問題を研究しています。日本経済の成長率の歴史を研究するのに役立つと思います。

また私は，Tukey先生への御恩返しと思い，法政大学夜間大学院の論文指導として，経済関係の研究機関に勤める者に，統計学を使ってデータの解釈をすることを教えています。私の受賞が，統計学の実践に携わっておられる会員に励みとなっていただければ幸いです。

3　新名誉会員の紹介

2000・2001年度第3回評議員会(西南学院大学)において，次の2名の方が名誉会員として推挙され，第69回総会において承認されましたので，ご紹介いたします。

●宇喜多義昌会員（東京理科大学名誉教授）

昭和20年代から半世紀以上に亘り，統計学の理論研究および統計教育の振興において絶えざる尽力を続け，数多くの論文，著書を著し，統計学の明解な講義により多数の学生の教育，そしてまた統計学専攻者のための専門的指導により多くの人材を育成されるなど，統計学の発展と普及のために並々ならぬ貢献を果たされた。

●三浦由己会員（駿河台大学名誉教授）

1957年から45年間の長きにわたり日本統計学会の発展に尽力された。この間評議員，会長として卓越した識見並びに優れた指導力を発揮され，学会の発展に多大な貢献をされた。また，その34年に及ぶ公務員生活において総務庁統計局長等を歴任され，国勢調査等政府の基本的な統計の実施，政府全体の統計活動の調整，統計研修等，我が国の政府統計の分野で多大な功績を挙げられるなど，日本の統計学の発展に顕著な寄与をなされた。

4　研究部会新設公募のお知らせ

統計学の研究活動を助成するため，日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来，これまでに多くの研究部会が誕生し，統計学の発展に寄与して参りました。この制度は，公募制をとり，原則として年2ないし3件が評議員会の承認を得て発足します。継続期間は2年間，助成額は1部会につき10万円で，部会設置期間終了時には，会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告が義務付けられています。また，研究会の開催を本学会のホームページに掲載することになっています。

募集は毎年行いますので，前年採用された2ないし3部会とあわせて，1年度中に4つから5つの部会が開かれることになります。

今年も研究部会を公募いたしますので，ふるってご応募ください。

締切日：2001年11月30日

応募先：日本統計学会事務局

〒106-8569　東京都港区南麻布4－6－7
統計数理研究所内

応募書類の書式などは事務局までお問い合わせください。採用は，12月に開かれる評議員会にて協議の上，決定いたします。

5　日本統計学会小川研究奨励賞

5.1　小川研究奨励賞の報告

会長　杉山　高一

「小川賞」は昨年度まで日本統計学会の推薦のもとに，統計学会奨励小川基金会で受賞者を決定し授与しておりましたが，今年度より日本統計学会小川研究奨励賞として，日本統計学会が受賞者を決定し表彰することになりました。小川奨励賞規定にしたがって日本統計学会誌編集委員会で選考を行った結果，本年度の受賞者を下記のように決定し，9月3日の総会において表彰式が行われました。

受賞者：紙屋英彦会員（岡山大学経済学部）
対象論文：Rankings Generated by Spherical Discriminant Analysis. Journal of Japan Statistical Society 30（2000）No.1, 43-51.

5.2　対象論文および受賞者の紹介

竹村　彰通（東京大学）

3群以上の判別についてはいくつかの考え方が提案されているが，一つの自然な方法とし，すべての2群をとり出して2群の判別をおこない，2群の優劣を定めそれらを組み合わせて多群の判別を行うという考え方がある。この場合には，もっとも確からしい群が1つ定まるだけではなく，群の間の優劣の順序が定められることになる。このようにして2群の判別を組み合わせた場合の多群の判別からランキングが自然に誘導される。

実は次元の低い空間に多群が配置されている場合には，誘導されたランキングは全く自由というわけではなく，可能なランキングに制約がはいる。何個のランキングか可能であるかという問題に関しては，Orlik, Terao等による超平面配置（hyperplane arrangement）の理論を援用する事ができ明示的な解答を与えることができる。ただし，具体的にどのランキングが可能かという問題は難しい問題であり，部分的な解答しか得られていない。

受賞論文は通常のユークリッド空間の正規母集団の判別ではなく，球面上のvon Mises-Fisher母集団の判別について以上の問題を検討し，いくつかの有用な結果を導いたものであり，ユークリッド空間の場合の結果との違いも明確にされている。

紙屋英彦氏は多変量解析の理論分野において，不変性やロバスト推定の研究に関しても水準の高い研究成果を得ており，我が国においてこの方面の貴重な人材として今後とも活躍が期待される。小川研究奨励賞の受賞者としてまことにふさわしい若手研究者である。

5.3　小川研究奨励賞を受賞して

紙屋　英彦

このたび思いがけなく小川賞を頂けることとなり，大変光栄に存じます。過去の偉大な受賞者のかたがたと比較して自分の仕事の貧弱さはお恥ずかしい限りですが，奨励賞ということで，私の場合は今後に向けての叱咤激励と受け止め，ありがたくお受けさせて頂きます。

統計学の勉強を始めてからこれまで，主にinvariance，超平面配置を用いた多群の判別問題，ロバストな主成分分析などに興味を持ち研究を進めて参りました。今回の対象論文は上に述べた判別問題の研究に関するものであり，以前 Journal of Multivariate Analysisに発表した論文Kamiya and Takemura（1997）の続編にあたるものであります。これらの論文を執筆していた当時は，この問題は統計学における判別問題，あるいは計量心理学・マーケティングサイエンスにおける展開モデル・理想点モデルとして捉えておりました。しかしその後，経済学部に勤めるようになり，同じモデルが社会的選択理論においてEuclidean

Preferenceとして研究されていることを知り，しばらく離れていたこの問題に最近再び興味を持つようになりました。

学生時代から現在まで，統計学の勉強・研究を進める上で，実に多くの先生方のお世話になりました。そのうち特に，私が大学で統計学を学び始めて以来の恩師である竹村彰通先生，および統計数理研究所勤務時代から現在までご指導頂いている江口真透先生には，論文の共著という形で直接研究上のご指導を頂くばかりでなく，それ以外のさまざまな面でも言葉では言い尽くせぬお世話を被っております。竹村先生は今回の対象論文の共著者でもあります。このタイプの異なるお二人の先生のご指導を受けることが出来ましたことは，私にとって非常に幸運であったと思っております。またお名前は記しませんが，大学院時代の統計学輪講関係の先生方，統計数理研究所の先生方，岡山大学経済学部の先生方，その他統計学会関係のさまざまな先生方からは，さまざまな形でご指導・ご助言を頂いており，今回の受賞はこれまでお世話になったこれら多くの先生方のお蔭であると考えております。

今後はこの受賞を励みに，また賞の名を汚さぬよう，さらに精進して参りたいと存じます。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴：1968年9月5日大阪生れ。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士（経済学）。統計数理研究所を経て，現在，岡山大学経済学部助教授。

6　第69回日本統計学会大会（福岡大会）

—大会企画担当理事報告—

岩崎　学，鎌倉　稔成，田中　勝人

第69回大会は2001年9月1日（土）から9月4日（火）の4日間にわたり，福岡市の西南学院大学を会場に開催されました．今回は，韓国で開催されたISIミーティングと時期を合わせるために，例年よりも遅い時期の開催となりました。

9月1日の2つのチュートリアル・セミナー（ウェーブレットと統計解析，および，臨床試験を支える因果推論）に続き，2日からは3日間，4会場で9つの共通テーマを中心に招待講演4件（日本人1件，外国人3件）を含めた計185件の研究報告がありました。

チュートリアル・セミナーは，ISIのサテライト・ミーティングと重なった関係で参加者数が危ぶまれましたが，結果的に166名を数え，盛況かつ成功裡に終わりました。午前の「ウェーブレットと統計解析」は，統計学の観点からウェーブレットを平易に解説していただきましたが，統計学における利用に関しては，講師の方々の慎重な姿勢が印象に残りました。午後の「臨床試験を支える因果推論」は，医学においても因果関係を見つけ出すことのむずかしさが説明されましたが，同時に，統計学の有効性が強調されました。

また，一般報告は，報告時間を昨年から一律20分にしましたが，特に支障はなく定着した様子で，大会運営を円滑に進めることができた要因ともなりました。なお，大会参加者数は500名（会員416名，非会員69名，賛助会員7名，団体会員4名，招待4名）でした。

また，3日夕刻からの懇親会は，博多湾を一望できるすばらしい場所で，海に沈む夕日を背に，会員相互の親睦を深めつつ，おいしい海の幸を満喫することができました。

例年のような夏の暑さとは無縁で，しかも，快適な会場設備の中で，第69回大会をこのような盛況のうちに終えることができましたのも，会員の皆様，および，安楽和夫大会運営理事をはじめとする開催校組織委員会の新谷正彦（委員長），吉岡慎一，小島平夫，崔宗煥各氏のご尽力によるも

のと心より感謝する次第です。

また，チュートリアル・セミナーを企画して下さった柳本武美氏（統計数理研究所），共通テーマを企画して下さった岩崎学（成蹊大学），大瀧慈（広島大学），鍵村達夫（日本ベーリンガーインゲルハイム），加納悟（一橋大学），坂田利男（九州芸術工科大学），新谷正彦（西南学院大学），中野純司（統計数理研究所），三浦良造（一橋大学），和合肇（名古屋大学）の諸氏，および座長をお引き受け下さった会員の方々にも，この紙面を借りてお礼申し上げます。

なお，今回のプログラム編成委員は岩崎学（成蹊大学），大森裕浩（東京都立大学），鍵村達夫（日本ベーリンガーインゲルハイム），鎌倉稔成（中央大学），竹内恵行（大阪大学），田中勝人（一橋大学），前園宣彦（九州大学），吉田朋広（東京大学）の８名でした。

7　第70回大会のお知らせ

渉外担当理事　広津千尋，国友直人，竹村彰道

第70回大会の日程と場所は次のとおりです。

期間：2002年９月７日（土）－11日（水）

場所：明星大学日野校舎（東京都日野市）

来年度の統計学会は日程的には本年度とほぼ同時期に行われますが，特記すべきこととして，応用統計学会および日本計量生物学会との連合大会として開催されます。これは単なる同時開催とは異なり，企画・実行を合同で行うものであり，会報No.108でも報告したとおり既に企画委員会および実行委員会が３学会代表により組織されています。連合大会のメリットとしては重複する無駄や煩雑さを避けられる，多くの人と同時に会合できる，多様な話題に触れ，異分野間の接触が増す等のことが考えられますが，本大会の成功が将来的にも大きな意義を持つと考えられます。多くの会員の皆様の積極的な参加とご協力をお願いします。なお，場所は異なりますが，日本分類学会も時期を合わせて開催されます。

シリーズ：統計学の現状と展望

8　フリーな統計システムＲの話

間瀬　茂（東京工業大学）

私は日頃統計計算よりは数式をいじくる方が多く，たまにデータを解析すると奇異の目で見られかねない，良くあるタイプの統計家であるが，ある事情からＲという統計システムの附属文章の邦訳をボランティアで始めることになった。そもそもの始まりは乏しい予算では購入できない商用統計パッケージに代わるフリーなシステムを探すうちにＲというパッケージの存在を知り，そのメイリングリストを購読中たまたまある日本人による附属ドキュメントの邦訳を始めたという記事を見た事にある。好奇心から件の人物のウェッブページを覗き仰天した。この人物は会社の業務にＲを使っている方であるが，失礼ながら統計学の知識も計算機の知識も，そして英語の知識も素人レベルで，放っておくと「とんでも本」なみのマニュアルが出来そうであった。これが世界的に使われているシステムの邦訳ということになると放っておけないと，慌ててお手伝いを申しでることになった。ただし出来はともかく，こうした作業を始めたのが一般ユーザーだったことは専門家として忸怩たるものがあった。幸い他にも手伝いたいという人物が何人か名乗りで，とりあえずＲの基本

マニュアルの翻訳を完成するに至った。関連して有志による小さなメイリングリストR-jpも開業した。

Rはベル研で開発された統計言語Sの完全フリー版を目指して開発が始まったシステムで，別名GNUS S, S cloneとかpoorman's Sと呼ばれる。名前の由来はSの一歩手前ということらしい（?)。ニュージーランドの統計家がプロトタイプを開発した後ソースを公開し，フリーソフトの御本家GNUSの公式ソフトに登録されたこともあり，たちまち全世界的な開発サポートを獲得することに成功した。開発の基本精神は単純で，商用システムであるSやS-plusとの互換性を限りなく目指す，つまりはSの持つ統計言語としての優れた機能を完全にフリーなシステムで実現することにある。実際開発者の説明ではSやS-plusのコードの95%は一切変更無しで動くそうである。又多くのサポーターを擁する結果として，Rが動くOSはLinux（6種類の主要ディストリビューション用バイナリが存在）はもちろん，MS-Windows，MacOS，OSFを含む。

Linuxの成功が端的に示すように，成功するソフトの開発は，優れた基本設計，潜在的な大きな需要，ソースの公開，そして何よりも広範囲の熱心なユーザー兼サポーターと，それを束ねる比較的小数の献身的な開発コアチームの組織化にあるようである。こうした点でRは模範的である。現在12人からなる開発コアチームにはS自身の開発者の一人であるJ. Chambers，フリー統計解析システムのいまひとつの雄であるLispStatの作者のL. Tierney，そしてB. Ripleyがいる。とくにRipleyはMS-Windows版のRの開発の中心らしく，r-helpと呼ばれるユーザーメイリングリストへの質問の大半に自ら回答する熱心さで「RはRipleyのR？」と誤解しかねない。

マニュアル類の充実も印象的であり，現在6種類の公式マニュアルと600余りのヘルプ文章（man，html，latex版)，そしてニュースレターを持つ。更にユーザーが独自に開発した特定用途向けのパッケージはSのそれを含み相当の数にのぼる。メイリングリストによる情報交換も活発で，全てに目を通すのが困難なほどである。R自体が様々なフリーソフトの利用の上に成立していることもあり，最初からフリーなソース（C，C++，Fortran）の取り込みを容易にする機構を備えていることも注目に値する。

ところで，そもそものRのドキュメントの翻訳はその後どうなったのであろうか。一つは私がでしゃばり過ぎの感を与えたのかと反省しているが，続けて翻訳作業を続けようとの呼びかけも虚しく，現在は私の個人プロジェクト化している。幅広い統計・計算機用語を含む文章の訳は，専門家ではあるもののヘビーユーザーとは程遠い私に取っても決して容易ではなく，意味不明のままそれらしく訳すという裏技を時おり駆使せざるを得ない。現在6つの公式マニュアルの内2つ，そして600種類余のヘルプ文章のうち半分弱が完了している。ただし今年だけでもRのバージョンは1.1から1.3まで上がっており，訳すべき文章（ユーザー貢献パッケージの膨大なそれはさておき）の数もそれにつれて増え，既存の文章の改訂分まで考えると終りのない作業になりそうで，正直いって「英語で読むのが一番」といいたくなる。

しかし，そもそも統計システムの「真のユーザー」は一般ユーザーであることを考えれば，日本語マニュアルの存在はなくてはならないと考え，暇な（そして忙しくてうんざりする）時に細々と作業を続けている（志のある方の協力を願う次第である。英語の計算機マニュアル位見ずらいものはないと思うのは私だけであろうか)。統計学は使われてこそ意味を持つことはいうまでもない。Rのようなフリーでありながら，高機能で広範囲な統計計算用システムの存在は，統計学の有用性を社会に知らしめるまたとない助けになるはずである。実際専門家のみならず一般ユーザーも一度Rを使用すると，使い勝手の良さに感銘を受けるようである。統計学者が編み出した新しい手法も，こうしたシステムのパッケージ化されることにより，一般ユーザーが容易に使うことが出来るようになる。最近強く思うことはRが統計手法を必要

とする各応用分野の若手のfirst choiceになって欲しいということである。こうした分野では統計的手法を頻繁に使っていながら，計算そのものは古色蒼然とした秘伝のソフトに頼り，結果として若手自身も伝統的な手法の枠を超えられず，統計学に対する認識自身も化石化してしまうことが稀ではないようである。例えばEDAの手法が登場し30年経つのに，ほとんど市民権を得てないことを思い出して欲しい。主たる責任は統計教育にあるが，容易に実行できる共通的なソフトの前提無しに教え学ぶことが極めて困難なことは言うまでもない。

R以外にもフリーもしくは商用ソフトは数多くある。私自身はこうしたソフトを使った経験はなく，Rと比較した長短を論ずる資格はない。フリーであることは，逆に自己責任を意味し，敷居が高くなることも事実である。専門家はいざとなれば自分でプログラムを組めば済む。ただ広範囲の一般ユーザーにお勧めできるシステムというと選択肢は自ずから限られてくる。専門家に期待したいことは，開発した手法を例えばRのパッケージ化することにより，全世界の不特定多数のユーザーが使えるようにすることである。これは又開発した手法を宣伝する最高の手段になる。又統計学の本を出版する際には，解説している手法や例示用データを一揃いでRのパッケージ化すれば，読者が容易に実習出来るようになる。実際そうした統計本と連係したパッケージが既に幾つか存在する。これも，フリーでSとの高い互換性を持ち，又パッケージ化の手順を詳細に標準化しているRならではのことである。将来R/Sが全世界の統計ユーザーの共通リテラシーになるといったら暴言になるであろうか。

Rに付いては公式サイトCRAN（http://cran.r-project.org/），邦訳文書に付いては私のウェッブページ（http://www.is.titech.ac.jp/~mase/）を参照されたい。メイリングリストR-jpでは完璧とは程遠いものの，有志によるR/Sに関するサポートも得られる。最後に余談であるがGNUS登録ソフトウェアの一つにPSPP（?!）というものがあるのをご存知だろうか。

シリーズ：統計学の現状と展望

9　Environmetrics，四方山話

大瀧　慈（広島大学・原爆放射能医学研究所）

神様が日頃の筆無精を叱咤されようとしたのか，思いがけず会報原稿の依頼を受けてしまった。以下，駄文をご容赦いただきたい。私は，原爆放射能医学研究所で，放射線の生物影響を中心に統計的データ解析について研究している。どうやら日本の大学に所属している統計学の研究者としては，生データに接する機会が多い特異なポストに居るらしい。

所属している教室は，「社会医学部門・環境情報計量生物分野」という舌を噛みそうなややこしい名前になっている。先代の教授らによる拝命であるが，英文表記については，私が（当時それが無かったので，），Wiley社から出版されている同名の雑誌の名前をヒントにして，Department of Environmetrics and Biometricsと名付けた。これが意外な反響を得ている。この単語は普通の辞書には掲載されていないし，スペルチェックには必ず引っかかる。数年前に，論文をEnvironmetricsに投稿したところ，Editor（Dr.El-SHAARAWI）から査読報告とともに所属名に関して，「Environmetricsの単語を冠するDepartmentは世界の中で他にない，そのうち“研究部門”の紹介記事を寄稿して欲しい」という旨の手紙が送られてきた。名前はDepartment付きなのであるが，その実情は私を含めて４人の研究者と博士課程の院生２人で構成された“１つの小講座”に過ぎない。

Environmetricsを冠したタイトルの国際会議が，この8月末に博多にて開かれた。その直前にソウルで行われたISIのサテライト会議の一つとして，九州大学の柳川堯教授のご尽力により敢行されたもので，会長は吉村功東京理科大学教授が務められた。海外からも，Dr. Piegorshu（South Calrolina大学）やDr.Ei-Shaarawi，Dr.P.K.Sen（North Carolina大学）などの著名な研究者が講演者として参加し，放射線やダイオキシンなどの曝露と健康影響の統計的評価をテーマ題材として，最新の研究結果の報告や活発な議論が展開された。講演内容を大別すると，化学物質の毒性評価に関する統計モデルおよび解析，多段階発がん仮説に関する数理モデルおよびデータ解析，空間統計処理に基づく疾病地図の作成法，大気汚染による呼吸器疾患罹患のリスク評価法と解析事例，その他方法論に関するもの，であった。海外からの参加者の25名に比して，国内からの参加人数が120名程度と，思ったほど参加者人数が伸びなかった。この会議が開かれた同じ時期に並行するスケジュールで関西でもISIのサテライト会議として統計学関連の別の国際会議が開かれたことも，参加人数に影響したようである。このことはサテライト会議の設置にあたってもう少し考慮されるべきであったと思うが，それにしても，なぜ，人気が無いのであろうか。

1）スポンサーが付きにくい（実際，今回の会議に関して，柳川教授も資金繰りに相当苦労されたらしい。）お金儲けとは，縁が無さそう。
2）時の政府などの体制側としばしば対立的立場に……。
3）データの収集に長期かつ大規模なフィールド調査を要することが多い。
4）因果関係に直接迫るような明確な成果をなかなか挙げられず，その結果，いわゆる高級雑誌に論文が採用されにくそう。
5）データ構造が複雑で，解析が容易ではなさそう。
6）ノーベル賞やフィールズ賞とは縁が無さそう。

要するに，「苦労が多い割には見返りが期待できない」ということなのであろう。（そういえば，少なくとも今回の会議に関して国内からの参加者の面々は，会長さんを始め愚直に過ぎるとも要領の良さそうな方はあまり見あたらなかったような……）

環境問題は，広島・長崎の原爆被爆やチェルノーブイリ事故などによる放射線被曝，SO2，NOxなどの排気ガスによる大気汚染，ダイオキシンなどの環境ホルモンや発がん物質による環境汚染や水質悪化，さらに，温室効果ガスの増加による地球温暖化など，いま，人類が直面している早期に解決すべき問題が山積している。問題が多いということは，それだけ挑戦のし甲斐のある魅力的な研究テーマの宝庫となっているはずである。

北欧やドイツでは，国政レベルで原子力発電所や化石燃料を使用した火力発電所を建設しない，ダイオキシンなど有毒化学物質の排出の規制強化などの地球環境保全のための具体的施策が実行されて久しい。日本でも遅ればせながら，バブル経済の崩壊後，四日市などの全国各地の公害訴訟での原告勝訴，諫早湾干拓後の有明海での水産物資源の激減などを契機として，一般市民の間にも右肩上がりの経済成長至上主義への疑念とともに環境保全と健康への関心が高まりつつある。長期的にみれば環境保全を避けて利益をあげることが不可能であることを，人類は苦い経験を通じて学んだのである。希望的観測かもしれないが，上に挙げた背景のうち，どうにも解決不可能と思われる6）は別として，1）と2）については，今後状況が変わりうるとの予感もしている。今すぐにお金儲けをしたいという方やあまり気の短い方には勧められないが，もっと多くの統計学関連の研究者に（特に若い方々に），環境科学関連データの解析に関心を持ってもらえたらと思っている。

広島大学では，医学部2年生を対象に「医学統計学」が必修科目となっており，私は講義担当者として，毎年，100人程の医者の卵を相手にBiometricsやEnvironmetricsの話題を織り交ぜながら，データ解析の手法について論じている。その

最初の講義の際に，自由記載を前提として下記のような課題を出し，学生の反応をみることにしている。

Ｑ１．卵が先か鶏が先か？

Ｑ２．「河川や湖の底に炭を敷くと水質の改善に効果がある」は真実か否か？また，その根拠を述べよ。

これまでに手にした回答は，冗談ともつかない珍回答や迷回答がほとんどであり，未だ満点を与えられるようなものには巡り会っていない。何れの課題もBiometricsとEnvironmetricsの本質に深く関わっているものと思っているが，読者の皆様のご回答はいかに？（私自身の“模範回答”をどうしても知りたい方は，メールにてご連絡ください。）

以上をもって統計学会会報を脱稿しようとしたとき，アメリカから大変な事件の発生が報じられた。ニューヨークのマンハッタンの超高層ビルやワシントンにある米国国防総省の建物（ペンタゴン）などを標的とした同時多発テロにより5000名を超える死者行方不明者が出たとのことである。一般市民を巻き込んだテロはそれを正当化しうる論理の余地を持ち得ないのはもちろんであるが，なぜ，一瞬にして5000名以上の命が失われるような事態になったのか，いろいろな課題が提示されているように見える。事件の背景として，宗教的ないし社会的環境要因を別としても，高さ400m余の超高層ビルの中に数万人が働いていたことが大きな誘因になったのではなかろうか。もし，原子力施設が標的になっていたら……。この問題は，EconometricsとEnvironmetricsの双方に係わる重要な問題であり，早々に本学会の研究者の方々に関心を持っていただき，検討していただけたらと思っている。

10．国際統計協会（ISI）第53回大会に出席して

三浦　由己（駿河台大学名誉教授）

国際統計協会（ISI）第53回大会は，2001年８月22日（水）から29日（水）まで，韓国ソウルにおいて開催された。

会場となったのは，ソウル市に2000年５月に竣工したCOEX（Convention and Exhibition Center）で，国際会議場と展示場が併設された立派な施設であった。その地下には，アジア最大といわれる大きなCOEXモールがあり，多くの商店や飲食店が並んでいる。

２年前にフィンランドのヘルシンキで開かれた第52回大会が，それまでの最大規模で，最新の情報通信技術を駆使したすばらしい運営で大成功を収めたのに触発され，今大会の受入れの中心となった韓国統計庁は，21世紀に入って最初に開かれるこの大会を「統計のオリンピック」と位置付けて，非常に張り切って，準備，運営に当たった。特に，日本に対しては，大勢の人が参加するよう協力を求めてきた。

開会式は，８月22日16時から会場の大ホールで開かれた。開会式には，国内組織委員会の委員長を務めるYoon Young-Dae統計庁長の開会の挨拶に始まり，名誉委員会の委員長であるLee Han-Don（李漢東）首相が歓迎の挨拶を述べた。Kim Dae-jung（金大中）大統領は，当初臨席の予定であったが，ベトナム大統領の来韓と重なったため，ビデオで祝辞を述べた。そのあと，ISIのJean-Louis Bodin会長の挨拶，Jin Nyum副総理・財務経済相のキーノート・スピーチがあった。開会式では，韓国民俗音楽のオーケストラの演奏，韓国のテノール歌手Im Oong-Kyunとソプラノ歌手Jun Hyo-Shinの歌唱，太鼓や踊りが披露された。開会式の後，COEXで，歓迎レセプションが開かれた。

研究発表は，８月23日（木）から29日（水）までの１週間，土曜日の半日を入れて正味５日半，２時間15分を１コマとして，午前１コマ，午後２

コマの時間枠で行われた。その間を縫って，早朝および昼休みに，多くの会合や委員会が開かれた。

組織委員会のまとめによると，参加者は同伴者189名を含め，116ヶ国からの2,597名にのぼった。そのうち，地元韓国からの参加者が1,071名で，アメリカ合衆国の203名，日本の195名，中国の126名がそれに続き，次期大会開催国のドイツが52名，カナダ，イギリスがそれぞれ43名であった。

セッションの数は，招待論文セッションが84，寄稿論文セッションが105で，このほかにポスターセッションが2つあった。最終プログラムに載っている論文数を数え上げると，キャンセルされたものを除いて，招待論文が264，寄稿論文が654，ポスターセッションの論文が13である。

今回は，恒例の会長招待講演のほかに，特別に会長招待のセッションが設けられ，2000年度ノーベル経済学賞受賞者2人の講演があった。

（1）James J. Heckman（米，シカゴ大学）："Casual parameters, structural equations and treatment effects"

（2）Daniel McFadden（米，カリフォルニア大学バークレー校）："Statistical simulation".

また，招待論文セッションの1つとして，Asian Statistical Forumが開かれ，アジア地域の統計協力について議論が行われ，官庁統計，学会を含めたこの地域の統計協力の推進について，参加者の間で合意がなされた。

今大会は，発表論文の数が多く，セッションの数が多かったため，同じ時間帯に招待論文セッションが6ないし7，寄稿論文セッションが7ないし8，合わせて十数個のセッションが平行して行われたため，会議の内容を全体的に紹介するのは不可能である。

ISIの総会は8月27日（月）午後に開かれ，19の議題について審議あるいは報告が行われた。その主な内容は，次のとおり。

（1）執行委員会報告では，会長から前大会以後2年間の活動の概要が報告された。報告の中で，会員の年齢構成が高齢化しており，会員の若返りの必要が指摘された。そのために，会員拡大・若返りを図るための特別委員会を設け，David Mooreが委員長を務めることとなった。

（2）役員選挙の結果－2000年秋に行われた会員の郵便投票の結果，2001～2003年の次期会長にStephen M. Stigler（米），副会長にJae Chang Lee（韓），Denise A. Lievesley（英），Jef L. Teugels（ベルギー）の3人が選ばれ，2001～2005年の評議員8人が選ばれた旨報告があった。

（3）指名委員会（Nominations Committee）の構成－2003～2005年の次期会長，副会長，2003～2007年の評議員の候補を選ぶ指名委員会に，7名の委員が選ばれ，筆者が委員長を勤めることになった旨報告があった。

（4）新会員の選挙結果－2001年度第1回目の会員選挙の結果，50名の新会員が選出された旨報告があった。本学会の小島宏，前園宜彦両会員が新会員に選ばれた。本年度第2回目の会員選挙は11月8日に締め切られる。

（5）ISI Service Certificateの授与－今回，ソウル大会の準備，運営に貢献した韓国統計庁のYoon庁長，Choi課長，Lee教授の3氏に授与された。

（6）ISI規約の改正－ISIの一般会員の呼称をordinary memberからelected memberに変えること，その他主として整合性を図るための文言の整理にかかる改正案について，2000年秋に郵便による会員の賛否を問う投票が行われたが，その結果，有効な投票数が確保され，原案通りの改正に賛成の意見が大多数を占めたので，今回の総会で規約改正を承認した。

（7）ISI Service Certificateの規程の承認－前回のヘルシンキ大会総会で賞の見直しが提案され，カナダ統計局のFellegi局長を委員長とする委員会を設けて検討した結果，これまで3種類あった賞を廃止してISI Service Certificateに変えることとし，その性格と授与基準が定

められた。

（8）分科会（section）設置基準の承認。

（9）ISI出版物：－

- STMS（Statistical Theory and Method Abstracts）－2001年以降CD-ROM版。Web版も作成予定。
- ARIS（Annual Report on International Statistics）－印刷物は1999年を最後に廃止。その内容はISIのホームページで提供。
- Statisticians of the Centuries－日本統計協会の援助で編集した本書は近く刊行。
- Dictionary of Statistical Terms－新版は2002年にOxford University Pressから刊行予定。

（10）今後の大会開催地－

- 第54回大会は2003年8月13日～20日にベルリンで開催。
- 第55回大会は2005年にオーストラリア・シドニーで開催。
- 第56回大会は2007年にスイスで開催。都市は未定。

会期中，統計学会代表者のオープンミーティングが開かれ，各国統計学会間の協力について意見交換が行われた。本学会から，杉山会長が出席された。

大会終了とともにISI会長が交替，新会長はオーストラリア統計局のDennis Trewin局長。

ソーシャル・プログラムとしては，ソウル市長主催の歓迎レセプション，リトル・エンジェルスの観劇，漢江クルーズのVIPディナー，ウォーカーヒルのホテルの庭でのフェアウェルパーティ，週末の土曜日午後と日曜日終日のツアーなどが行われた。ソウル市長主催の歓迎レセプションでは，太鼓の演奏，人気コメディアンのナンタの出演，フェアウェルパーティでは，子供のテコンドウの披露，人気歌手の歌，太鼓の演奏などがあった。

11　統計教育委員会報告

統計教育委員会委員長　村上　征勝（統計数理研究所）

統計教育委員会では，学校や企業での統計教育のあり方等を検討するため，1～2ヶ月に1回の頻度で委員会を開催しております。委員会は通常土曜日の午後に統計数理研究所で開催しており，この委員会には統計学会の会員の方ならどなたでも参加できます。参加ご希望の方は下記までご連絡ください。

〒106-8569　東京都港区南麻布　4-6-7
統計数理研究所　　村上　征勝
Tel & Fax 03-5421-8766
E-mail：murakami@ism.ac.jp

なお，現在の委員会は以下のような方々で構成されています。

新家健精，縣田俊彦，飯田博和，伊藤孝一，景山三平，片岡正昭，栗原孝次，島田俊郎，杉山高一，瀬尾隆，中條安芸子，二宮智子，砂浜敬郎，程野眞，丸山久美子，三浦由己，三宅章彦，◎村上征勝，矢野一幸，渡辺美智子，伊藤彰彦，上田尚一，平川孝三郎，水谷弘，水野坦，宇喜多義昌，小野英夫，濱田宗雄，松下嘉米男，美添泰人，村上正康，芳沢光雄（◎は委員長）

また，これまで以下のような6回の委員会を開催いたしました。

第1回委員会　2001年2月3日　出席者19名

1．講演「統計教育と数学教育の危機」
　芳沢　光雄（東京理科大学）
2．新委員会の活動方針について

第2回委員会　2001年3月23日　出席者16名

1．講演「統計教育のための電子図書システムについて」渡辺　美智子（東洋大学）
2．新委員会の活動方針について

第3回委員会　2001年5月19日　出席者18名

1．講演「慶應SFCにおけるデータサイエンス入門教育」片岡　正昭（慶応義塾大学）
2．新委員会の活動方針について
3．その他

第4回委員会　2001年6月23日　出席者14名
1．新委員会の活動方針について
2．その他

第5回委員会　2001年7月28日　出席者14名
1．講演「高等学校数学科における統計」矢野　一幸（筑波大学付属高校）
2．その他

第6回委員会　2001年9月2日　出席者7名
1．統計教育分科会の設立について
2．その他

12　2000・2001年度第3回評議員会議事録

日時：2001年9月1日（土曜日）17：00～19：35
場所：西南学院大学2号館中会議室（1）（2）
出席者：杉山高一会長，小西貞則理事長，伊藤彰彦，伊藤聡，岩崎学，鎌倉稔成，佐藤学，瀬尾隆，竹村彰通，土屋隆裕，濱砂敬郎，平川孝三郎，広津千尋，前園宣彦，松田芳郎，丸山久美子，水田正弘，村上正康，矢島美寛，山口和範，美添泰人，渡辺美智子，他委任状11名，安楽和夫大会運営理事

杉山会長より挨拶があり，定足数を満たしていることが確認された。

＜報告事項＞

＜議題1＞　理事会からの報告

［会誌編集］小西理事長，矢島和文誌担当理事より，それぞれ欧文誌，和文誌の編集状況について報告があった。

［大会企画］鎌倉担当理事より，第69回大会の状況について報告があった。

［広報］瀬尾担当理事より，会報は10月中に発行予定である旨およびドメイン名の取得について報告があった。

＜議題2＞　第69回大会について

安楽大会運営理事より大会運営について報告があった。

＜議題3＞　統計学会賞受賞者について

杉山会長より，日本統計学会賞受賞者として畠中道雄氏を選出したこと及びその理由について報告があった。

＜議題4＞　小川研究奨励賞受賞者について

小西理事長より，日本統計学会が小川研究奨励賞の授与を実施する経緯について説明があった後，受賞者として紙屋英彦氏を選出した旨報告があった。

＜議題5＞　各委員会からの報告

杉山学会活動特別委員会主査より，同委員会の活動報告があった。つづいて，矢島学会組織特別委員会主査より，入会に際して必要な推薦人制度，統計関連学会の連合，学会の法人化等についての同委員会での検討経過について説明があった。統計教育委員会について，平川評議員から同委員会の活動報告があった。

＜議題6＞　その他

松田評議員より，学術会議の経済統計研連の活動に関して報告があった。竹村評議員より，科学研究費の申請領域として統計科学が変更される可能性があるとの報告があった。

＜審議事項＞

＜議題1＞　2000年度事業報告案，決算案および会計監査について

伊藤聡理事より，資料に基づき，2000年度事業報告案，決算案について説明があった。つづいて，濱砂敬郎監事より，会計監査について報告があり，承認された。

＜議題2＞　2001年度事業計画案および予算案について

伊藤理事より，資料に基づき，2001年度事業計画案および予算案について説明があり，小修正の

結果承認された。なお，収入を増やすため，団体会員を勧誘した方がよいとの提案があった。

＜議題３＞　第69回総会の式次第について

伊藤理事より，資料に基づき説明があり，承認された。

＜議題４＞　第70回大会について

小西理事長より，第70回大会は連合大会として実施すること，連合大会に向けて統計関連学会連合大会連絡委員会が開催されたことが説明された。つづいて，広津評議員より，９月７日から11日にかけて明星大学日野校舎で実施する予定であること，費用に関しては連合大会連絡委員会で検討することが説明され，承認された。これに関連して，会誌の連合についても検討して欲しい旨の発言があった。

＜議題５＞　高齢特別会員制度の変更について

矢島学会組織特別委員会主査より，資料に基づき，高齢特別会員は廃止し，会員歴等の条件に応じた会費減免の制度を設ける案の説明があった。条件について議論の後，基本的に原案通りで総会に提案することで承認された。

＜議題６＞　高齢特別会員制度の変更について

杉山会長より，資料に基づき，宇喜多義昌会員および三浦由己会員を名誉会員に推薦する件について紹介があった。それぞれの推薦人代表より推薦理由等の説明があった後，承認された。

＜議題７＞　入会希望者の承認

小西理事長より資料に基づき紹介があり，承認された。

＜議題８＞　その他

小西理事長より，渡辺広報担当理事および伊藤庶務会計担当理事が退任するとの報告があった。後任の理事として，山口和範会員の広報担当理事への就任および藤沢洋徳会員の庶務会計担当理事への就任が承認された。次回評議員会を12月８日前後に開催することとした。

13　第69回日本統計学会総会

13.1　2001年度（第69回）総会報告

日時：2001年９月３日（月）13：00～14：05

場所：西南学院大学２号館201号教室

開会：小西貞則理事長

1．会長挨拶

杉山高一会長より，大会運営関係者への感謝の言葉が述べられ，今大会の開催状況の概略が述べられた。

2．開催校代表挨拶

村上隆太西南学院大学学長より，歓迎の挨拶が述べられた。

3．議長選出

大和元会員を議長に選出した。

4．2000年度事業報告，同決算報告および会計監査報告

伊藤聡庶務会計担当理事より，事業報告案（下記13.2項参照）および決算報告案（付表）の説明，引き続き濱砂敬郎監事より会計監査の報告があり，それぞれ承認された。

5．評議員会からの報告

小西貞則理事長より，欧文誌の出版社を替え電子化したこと，小川研究奨励賞を日本統計学会が授与することとなったことが報告された。矢島美寛学会組織特別委員会主査より，高齢特別会員制度を廃止し，これに関連した会則を変更する旨の提案がされ，議論の結果，その趣旨については承認された。会則の変更条文案（下記13.4項参照）については，会報に掲載した上で会員からの意見を求めるなど，その対処を理事会に一任した。

6．2001年度事業計画，同予算について

伊藤聡理事より，2001年度事業計画案（13.3項）および予算案（付表）の説明があり，ともに承認された。

7．第70回大会について

小西貞則理事長より，2002年度の第70回大会は，応用統計学会と日本計量生物学会との連

合大会として，9月7日から11日までの日程で明星大学において開催する旨の説明があり，承認された。

8．名誉会員について

杉山高一会長より，9月1日に開催された評議員会において，三浦由己会員，宇喜多義昌会員が名誉会員として推薦されたことが説明され，ともに承認された。

9．その他

杉山高一会長より，第6回日本統計学会賞を畠中道雄会員に授与することが報告された。小西貞則理事長より，日本統計学会小川研究奨励賞を紙屋英彦会員に授与することが報告された。小西貞則理事長より，渡辺美智子広報担当理事および伊藤聡庶務会計担当理事が退任し，後任の理事はそれぞれ山口和範会員および藤沢洋徳会員とすることが説明され，ともに承認された。

13.2 2000年度事業報告（2000.4.1～2001.3.31）

1．日本統計学会第68回大会の開催

2000年7月25日，26日，27日，28日の4日間にわたり，北海道大学の担当で同大学において開催した。期間中の7月25日には第8回チュートリアルセミナーを開催した。

2．第68回大会講演報告集を発行した。

3．会誌の発行

Vol.30, No.1（6月，欧文誌），No.2（12月，欧文誌），No.3（12月，和文誌）を発行した。

4．会報の発行

No.104（6月），No.105（9月），No.106（12月），No.107（3月）を発行した。

5．第5回日本統計学会賞を浅野長一郎氏，竹内啓氏および村上征勝氏の3氏に授与した。

6．研究部会の活動

次の3つの研究部会が予定通り終了した。

「数理科学における諸手法への統計科学的アプローチ」（川崎能典主査：1999年11月発足，2000年11月終了）

「統計学におけるインターネットの利用」（中野純司主査：1999年11月発足，2000年11月終了）

「非線形時系列解析と金融工学」（谷口正信主査：1999年11月発足，2000年11月終了）

また，次の4つの研究部会が活動中である。

「環境データの解析」（清水邦夫主査：1999年11月発足，2001年11月終了予定）

「データマイニングにおける統計的手法と実験」（鎌倉稔成主査：1999年11月発足，2001年11月終了予定）

「統計学におけるインターネットの活用」（森裕一主査：2000年11月発足，2002年11月終了予定）

「非線形時系列解析と金融工学Ⅱ」（谷口正信主査：2000年11月発足，2002年11月終了予定）

7．各種委員会の活動

評議員会，理事会，その他各種委員会を開催した。

8．その他

（i）統計学研究奨励第14回（2000年度）小川基金会賞候補者の推薦は該当者なしとした。また，本事業は小川賞基金会より日本統計学会に移管された。

（ii）評議員選挙，会長選挙を実施した。

（iii）欧文誌の電子化・国際化について検討し，国立情報学研究所および国内外出版社との手続きを進めた。

（iv）海外研究者による大会招待講演の実施等，国際交流の推進に努めた。

（v）インターネット経由での情報発信の促進に努めた。

13.3 2001年度事業計画（2001.4.1～2002.3.31）

1．日本統計学会第69回大会の開催

2001年9月1日，2日，3日，4日の4日間にわたり，西南学院大学の担当で同大学において開催する。期間中の9月1日には第9回チュートリアルセミナーを開催する。

2．第69回大会講演報告集を発行する。

3．会誌の発行

Vol. 31，No. 1（6月，欧文誌），No. 2（12月，欧文誌），No.3（12月，和文誌）を発行する。

4．会報の発行

No.108（6月），No.109（10月），No.110（1月），No.111（4月）を発行する。

5．第6回日本統計学会賞，第15回日本統計学会小川研究奨励賞を授与する。

6．研究部会の活動

「環境データの解析」（清水邦夫主査：1999年11月発足，2001年11月終了予定）

「データマイニングにおける統計的手法と実験」（鎌倉稔成主査：1999年11月発足，2001年11月終了予定）

「統計学におけるインターネットの活用」（森裕一主査：2000年11月発足，2002年11月終了予定）

「非線形時系列解析と金融工学Ⅱ」（谷口正信主査：2000年11月発足，2002年11月終了予定）

2001年11月末を締め切りに，研究部会の新設を公募する。

7．各種委員会の活動

評議員会，理事会，その他各種委員会を開催する。

8．その他

（i）会員名簿を発行する。

（ii）国際交流を推進する。

（iii）インターネット経由での情報発信をさらに促進する。

（iv）統計関連他学会との合同大会開催・会員名簿の共通化等について検討する。

13.4　会則改正案

2001年9月3日西南学院大学において開催された統計学会総会におきまして，以下の3点を骨子とする会則改正案が承認されました。

（1）高齢特別会員制度を廃止する。したがって現会則9条および現会則，現細則，現統計学会賞規程にある「高齢特別会員」の文言はすべて削除する。

（2）現高齢特別会員は正会員に移行する。

（3）高齢特別会員制度に代わる会費減免の制度を設ける。その場合の資格要件，現高齢特別会員の待遇，減免された会費の額は以下の通りとする。

（a）正会員および名誉会員の方にたいしては，正会員および名誉会員としての会員歴が合計35年以上でありかつ常勤職に就いていない場合には，申告により会費の減免を認めることとする。学生会員としての会員歴は含めない。

（b）なおこれまで高齢特別会員であった方には，上記資格要件をみたさなくとも，引き続き会費の減免を認めることとする。

（c）減免された会費は（a），（b）の場合とも一律5,000円とする。

改正された新会則は総会開催日の翌日9月4日より既に施行されておりますが，旧細則3条に規定された会費の年額に関する条文に，上記（3）の（a），（b），（c）の骨子を明解に示した但し書きを挿入する必要があります。

9月1日に開催された評議員会において承認されました，以下のカギ括弧内の文章を旧細則3条に挿入する予定です。

「ただし，正会員および名誉会員については，通算して会員歴35年以上の条件をみたしかつ常勤職に就いていない者には，申告により会費の減免を認めることとする。

なおこれまで高齢特別会員であった者には，上記資格要件をみたさなくとも，引き続き会費の減免を認めることとする。減免された会費は5,000円とする。」

上記文案に御意見のある方は11月10日（土）までに，事務局へEメールあるいは手紙でお寄せ下さい（私宛ではありませんのでご注意下さい）。

学会組織特別委員会　主査　矢島美寛

〈2000年度決算〉

(2001年3月31日現在)

(i) 貸借対照表

(単位 円)

借方			貸方		
科目	期首	期末	科目	期首	期末
固定資産	2,069,098	2,069,098	学会自己資金	2,069,098	2,069,098[1]
流動資産	7,097,306	7,874,163	学会活動積立金	1,100,000	1,400,000
現金	19,029	28,338	役員旅費補助積立金	400,000	300,000
振替口座	3,312	7,414	名簿作成積立金	300,000	600,000
預貯金	7,074,965	7,838,411	OA機器積立金	350,000	550,000
			事務局移転整理積立金	1,250,000	1,550,000
			大会問題特別積立金	350,000	0
			繰越金	17,306	474,163
計	9,166,404	9,943,261	計	9,166,404	9,943,261

(ii) 収入

科目	細目	予算額(単位円)	決算額(単位円)
今期繰入金		47,000	47,306[2]
学会活動積立金取崩		1,200,000	0
役員旅費補助積立取崩		200,000	100,000
大会関係特別積立取崩		350,000	350,000
会費収入		10,788,000	10,610,850[3]
	名誉・正会員及び高齢特別会員	9,891,000	9,532,850
	学生会員	293,000	424,000
	遡及請求分	604,000	684,000
賛助法人費		1,315,000	1,520,000[4]
団体会員費		120,000	120,000[5]
科学研究費補助金「研究成果公開促進費学術定期刊行物」		800,000	800,000
雑収入		4,281,000	5,099,552
	雑誌購読料	371,000	345,710[6]
	報告集売上	1,500,000	1,461,200[7]
	大会参加費(非会員)	1,200,000	1,250,000[8]
	利子収入	10,000	8,212[9]
	広告収入	1,200,000	1,790,790[10]
	その他	0	223,640[11]
計		19,101,000	18,677,708

(iii) 支出

科目		細目	予算額(単位円)	決算額(単位円)
通常費	印刷費		6,173,000	6,076,531
		会誌(30巻1,2,3号)	4,573,000	4,618,530
		会報(104～107号)	1,200,000	1,081,625[12]
		その他	400,000	376,376[13]
	大会関係費		3,100,000	2,737,060
		大会開催費	850,000	850,000
		大会会場費	350,000	350,000
		報告集印刷費	1,100,000	1,081,080
		旅費補助	300,000	100,000[14]
		プログラム出版費	500,000	355,980
	研究部会費		400,000	400,000[15]
	学会運営委員会費		350,000	274,805
		評議員会	120,000	105,615
		特別委員会	40,000	10,000[16]
		財政政策委員会	20,000	20,000
		会誌編集委員会	30,000	12,000
		プログラム編成委員会	30,000	4,000
		理事会	80,000	76,850
		その他	30,000	16,340[17]
	事務費		4,253,000	4,371,099
		一般事務人件費	2,365,000	2,511,200[18]
		校正編集事務人件費	670,000	555,000
		発送事務人件費	290,000	291,500
		事務局費	270,000	274,087
		事務所賃料	381,000	383,787
		租税公課諸費用	21,000	21,000[19]
		その他	300,000	301,395[20]
	学会事務業務委託費		910,000	769,081[21]
	通信・郵送費		2,680,000	2,357,391
		会誌送料	420,000	441,000
		会報送料	1,260,000	1,150,020
		その他通信・郵送料	1,000,000	942,184
	役員旅費補助		200,000	66,900
	各種分担金		59,000	58,918
		日本経済学会連合	35,000	35,000
		ISI	19,000	18,918[22]
		国立情報学研究所	5,000	5,000
	ネットワーク部持費		0	20,000[23]
名簿作成積立金			300,000	300,000
OA機器積立金			100,000	200,000
事務局移転整理積立金			300,000	300,000
OA機器購入費			0	36,767[24]
予備費			176,000	32,050[25]
繰越金			0	474,163
計			19,101,000	18,677,708

(2000年度決算　注)

1) 事務局の什器・備品等の購入時簿価。減価償却はしていない。
2) 予算の方は千円未満四捨五入。貸借対照表参照。
3) 新入会員分(92名)と1999年度以前の未納回収等を含む(内訳:99年度以前未納分684,000円、2000年度以降前受け金分24,000円、入会金分88,000円)。
4) 賛助法人22件。賛助法人費は入会時の会費の10倍を1口とし、賛助法人費を値上げしていない。従って、各社1口の会費は異なる。
5) 団体会員3件(1件40,000円)。
6) 定期購読国内販売59組(177冊)、海外販売28組(84冊)(324,000円)、非定期予約売上およびバックナンバー売上(21,710円)。
7) 2000年版報告集売上(送料分を含む)。尚、大会時頒布数は473冊、頒布価格は1冊3,000円(名誉会員・正会員、学生会員)。
8) 非会員大会参加費(10,000円(報告集代含む)127人)。
9) 預金利率が低いため。
10) 広告掲載料の内訳:大会プログラム289,790円、会報No.104～107号分1,130,000円、報告集345,000円、名簿26,000円(前年度未回収分)。
11) 報告集規定枚数超過による付加金および出版者著作権隣接権より入金および前委員会残金等。
12) 104号28頁、105号40頁、106号34頁、107号32頁、計134頁。
13) 大会時の名札、評議員選挙投票用紙、会長選挙投票用紙等の印刷物およびゼロックス等。
14) 非会員依頼講演者への大会出席旅費補助金分(1名分)。
15) 「データマイニングにおける統計的手法と実験」研究部会、「環境データの解析」研究部会、「統計分野におけるインターネットの活用」研究部会、「非線形時系列解析と金融工学II」研究部会。
16) 2特別委員会分。
17) 大会時事務打ち合わせ経費等。
18) 広告獲得のため特別活動費を含む。
19) 都民共済掛け金。
20) 事務局員の交通費および大会時の交通費と宿泊費。
21) 学会事務業務委託費内訳:会員原簿管理50,000円、会費請求年3回427,560円、新入会員原簿作成26,700円、住所変更43,600円、ラベル作成185,540円、その他、新入会員リスト一覧、大会時会場振込用紙作成、消費税等35,681円。
22) 300スイスフラン。
23) ドメイン名使用料。
24) OA機器部品等。
25) 過去会員2名生花代および電報代等

〈2001年度予算〉

(2001年1月1日現在)

(i) 収　入　　(単位千円)[1]

科　目		細　目	
繰越収入金	474		474
学会活動積立金取崩	400		400
役員旅費補助積立金取崩	100		100
名簿作成積立金取崩	600		600
OA機器積立金取崩	250		250
会費収入	10,641[2]	名誉会員・正会員及び功績特別会員	9,533
		学生会員	424
		遡及請求分	684
賛助法人費	1,420[3]		1,420
団体会員費	120		120
科学研究費補助金「研究成果公開促進費 学術定期刊行物」	900[4]		900
雑収入	1,556		
		雑誌購読料	346
		報告集売上	1,500[5]
		大会参加費（非会員）	1,200[6]
		利子収入	10
		広告収入	1,500[7]
計	19,461		19,461

(ii) 支　出　　(単位千円)[1]

科　目		細　目	
印刷費	6,668		
		会誌（31巻1,2,3号）	4,348
		会報（108～111号）	1,200
		名簿印刷費	720
		その他	400
大会開催費	2,650		
		大会開催費	850
		報告集印刷費	1,100
		旅費補助	300[8]
		プログラム等印刷費	400
研究部会費	500		500[9]
学会運営委員会費	370		
		理事会	120
		特別委員会	10[10]
		統治機構委員会	20
		会員編集委員会	30
		プログラム編成委員会	30
		幹事会	100
		その他	30
事務費	4,130		
		総事務人件費	2,641[11]
		校正編集事務人件費	400
		発送事務人件費	350[11]
		事務用品	270
		事務室借料	346
		組織会課費負担	21
		その他	90[12]
学会事務業務委託費	910		910
通信・郵送費	3,195		
		会誌送料	500
		会報送料	1,260
		名簿送料	535
		その他通信・郵送料	900[13]
役員旅費補助	100		100
各種分担金	61		
		日本経済学会連合	35
		ISI	21
		国立情報学研究所	5
ネットワーク維持費	40		40
OA機器購入費	250		250
OA機器積立金	100		100
事務職員退職金積立金	300		300
予備費	157		157
計	19,461		19,461

(2001年度予算　注)

1) 千円未満を四捨五入した。
2) 昨年並みを想定した。
3) 賛助法人21社分（賛助法人の会費は入会時の会費に基づく）。
4) 2001年度交付額。
5) 総売上分として500冊見込んでいる（1冊3,000円）。
6) 非会員：10,000円×120＝1,200,000円。
7) 2001年度会報，大会プログラム，報告集の広告掲載費。
8) 非会員依頼講演者への大会旅費補助。
9) 1部会100,000円として5部会分を計上。
10) 学会活動特別委員会，学会組織特別委員会。
11) 交通費を含む。
12) 事務局員の大会時の宿泊費と交通費。
13) 電話料金，振込手数料，新入会員への名簿・会誌等の郵送費等。

14　理事会報告

14.1　2000・2001年度第3回理事会議事録

日時：2001年6月30日（土曜日）12：00～15：50
場所：統計数理研究所特別会議室
出席者：杉山高一会長　理事：小西貞則理事長，北川源四郎，矢島美寛，田中勝人，瀬尾隆，中野純司，国友直人，竹村彰通，広津千尋，安楽和夫，伊藤聡，土屋隆裕

＜議題1＞　各理事からの報告

［会誌編集］ 北川担当理事より，欧文誌第31巻第1号は論文9編で，印刷中であるとの報告があった。投稿用にLaTeXのスタイルファイルを公開したが，今後は審査過程もなるべく電子化したいとの発言があった。また，小川研究奨励賞の投票結果について報告があった。続いて矢島担当理事より，和文誌への投稿論文3件の審査状況，解説論文及び書評の編集状況について報告があった。

［大会企画］ 田中担当理事より，資料に基づき第69回大会のプログラムについて説明があった。プログラムの編集にあたっては所属名の表記を統一した，また今後関連分野の見直しを行う，との発言があった。

［広報］ 瀬尾担当理事より，会報108号は発送中であること，次回から会報の編集は瀬尾理事が担当すること，会報109号は10月に発行すること，が報告された。会報に小川賞受賞者の紹介を載せた方がよいとの意見が出された。

［情報］ 中野担当理事より，ドメイン名としてjss.gr.jp，日本統計学会.jp，統計学会.jpを取得したこと，jss.jpは取得できなかったことが報告された。統計学会のメーリングリストを作りたいとの意見が出され，運用した場合の問題点等に配慮しながら，今後作成する方向で検討することとした。また将来的には，会報もWeb上で公開し，広報担当と情報担当の理事を統合してはどうかとの意見が出された。

［渉外］ 竹村担当理事より，科学研究費の申請領域として統計科学の位置づけが変更される動きがあるとの報告があった。

＜議題2＞　2001年度第69回大会について

安楽理事より，大会の準備状況について説明があった。

＜議題3＞　2002年度統計関連学会連合大会について

広津理事より，資料に基づき，5月12日に開催された統計関連学会連合大会連絡委員会の報告があった。2003年度についても連合大会とする方向で進めることで了承された。

＜議題4＞　2000年度決算案および2001年度予算案について

伊藤理事より，資料に基づき2000年度決算案および2001年度予算案について説明があった。招待講演者への旅費補助および研究部会費について要望が出された。

＜議題5＞　2000年度事業報告案および2001年度事業計画案について

伊藤理事より，資料に基づき2000年度事業報告案および2001年度事業計画案について説明があった。

＜議題6＞　学会賞の賞状・記念品

矢島理事にお願いすることとした。

＜議題7＞　小川研究奨励賞の賞状・賞金

賞状は編集委員会で検討してもらうこととし，賞金は10万円とした。

＜議題8＞　評議員会の議題

伊藤理事より，資料に基づき評議員会の議題について説明があり，委員会活動については報告がある場合のみとすることとした。

＜議題9＞　評議員会の議題

伊藤理事より，資料に基づき総会の議題について説明があった。

＜議題10＞　退会の承認について

16名の退会について承認した。

＜議題11＞　その他

日本経済学会連合に日本統計学会から推薦する2名の評議員は，今後理事の中から選ぶこととした。杉山会長より，韓国の統計学会とお互いの欧文誌を安価で購読できるようにしてはどうかとの提案があり，海外での販売方針を含め検討することとした。矢島学会組織特別委員会主査より，評議員会に高齢特別会員制度の改正案を提案する旨説明があった。第69回大会の共通テーマへの講演を依頼した非会員の参加費は無料とするが，非会員に対しては，なるべく入会を勧めることとした。

14.2　2000・2001年度第4回理事会議事録

日時：2001年9月4日（火）12：10～12：50

場所：西南学院大学2号館中会議室（2）

出席者：杉山高一会長　理事：小西貞則理事長，北川源四郎，矢島美寛，岩崎学，鎌倉稔成，田中勝人，瀬尾隆，国友直人，竹村彰通，安楽和夫，伊藤聡，土屋隆裕

●応用統計学会のシンポジウムの協賛について承認した。

●学協会との連絡会議について北川理事に一任することとした。

●高齢特別会員制度の廃止に関連した会則変更を広報に掲載し，それに対する意見は事務局で受け付けることとした。

●杉山会長より，次回評議員会は12月8日13：30に開催されるとの報告があった。

●小西理事長より，9月2日に開催された連合大会連絡委員会の報告があった。

●大会の開催時期に合わせ，今後会報の発行時期を1ヶ月後ろにずらすこととした。ソフトウェアを紹介するセッションや学生のセッションを設けてはどうかとの提案があった。

●次回理事会は10月27日12：00に開催することとした。

15　修士論文・博士論文の紹介

修士論文・博士論文を，（1）氏名，（2）学位名，（3）取得大学名，（4）論文タイトル，（5）主査名（指導教員），（6）連絡先の順で紹介します（順不同）。なお，無記入の項目は省略しております。また，掲載漏れなどございましたら，会報担当まで再度ご連絡お願いいたします。

15.1　修士論文

1）芦原永則（Naganori Ashihara）
2）修士（理学）
3）東京理科大学理工学研究科情報科学専攻
4）Measure of departure from marginal homogeneity for square contingency tables having ordered categories
5）富澤貞男

1）上原真紀子（Makiko Uehara）
2）修士（理学）
3）東京理科大学理工学研究科情報科学専攻
4）Power-divergence type measure of departure from an entropy model
5）富澤貞男

16　会合案内

■会合案内

応用統計学会第23回シンポジウム

日本統計学会は下記の要領で行なわれる標記シンポジウムを後援しています．日本統計学会会員は応用統計学会の正会員の参加費で参加できます．

日時：2001年11月8日（木）午後～9日（金）

会場：統計数理研究所（東京都港区南麻布4-6-7）
参加費：正会員3,000円，非会員5,000円，
学生（正会員，非会員とも）1,000円
テーマ：ゲノムと統計
特別講演：鎌谷直之（東京女子医大），
伊藤陽一（東大・医），大橋　順（東大・医）
*11月8日（木）午前にチュートリアルセミナー予定.
テーマ：データ解析のための数値計算法入門
講師：土谷隆（統計数理研究所），
岩崎学（成蹊大学）

科研費基盤研究（A）
「統計学における理論と応用の総合的研究」
（研究代表者：杉山　高一）
「データの表現法と解析法」
研究分担者：水田正弘（北海道大学）
中西寛子（成蹊大学）
佐藤義治（北海道大学）
日時：10月23日（火）～24日（水）
場所：北海道大学情報メディア教育研究総合センター会議室他
問合せ：北海道大学　水田正弘
mizuta@cims.hokudai.ac.jp
http://tiss1.cims.hokudai.ac.jp/meetings/kaken2001/

2001年　11月
「因子分析と共分散構造分析に関する諸問題」
研究分担者：佐藤　学（広島県立保健福祉大学）
日程：11月9日（金）～10日（土）
場所：統計数理研究所（東京都港区）
問合せ：佐藤　学（広島県立福祉大学）
sato@hpc.ac.jp
「データマイニングにおける統計的方法およびソフトコンピューティングと時系列解析に関する研究」
研究分担者：鎌倉　稔成（中央大学）
渡辺　則生（中央大学）
日程：11月9日（金）～10日（土）
場所：中央大学・理工学部　6701号室
問合せ：鎌倉　稔成（中央大学・理工学部）
kamakura@indsys.chuo-u.ac.jp
「非線形モデリングと現象解析」
研究分担者：小西　貞則（九州大学）
谷口　正信（大阪大学）
日時：11月28日（水）～11月29日（木）
場所：九州大学国際ホール（箱崎キャンパス）
問合せ：小西　貞則（九州大学）
konishi@math.kyushu-u.ac.jp

2001年　12月
「計算機統計学とその医学・生物学への応用」
研究分担者：田中　豊（岡山大学）
折笠　秀樹（富山医科薬科大学）
日時：12月3日（月）～4日（火）
場所：岡山コンベンションセンター
問合せ：田中　豊（岡山大学）
tanaka@ems.okayama-u.ac.jp

2002年　1月
「計量経済・計量ファイナンスの諸問題」
研究分担者：国友　直人（東京大学）
高橋　一（一橋大学）
日時：1月7日～8日
場所：慶応大学三田キャンパス
問合せ：国友　直人（東京大学）
kunitomo@ e .u-tokyo.ac.jp
「高次元データ解析の研究」
研究分担者：藤越　康祝（広島大）
若木　宏文（広島大）
日時：1月10日～11日
場所：広島大学理学部
問合せ：広島大学　若木　宏文
wakaki@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

＊その他の会議
2001年12月
＊12.19－21：International Conference on Statistics, Combinatorics and Related Areas. The Eighth International Conference of the Forum for Interdisciplinary Mathematics

http://www.uow.edu.au/informatics/maths/statconference/

2002年1月

＊1.31－2.1：Modeling Seasonality and Periodicity（FTSM3）

主催：統計数理研究所

会場：SGIホール（東京，恵比寿ガーデンプレイス）

http://www.ism.ac.jp/~kawasaki/ftsm3/index.htm

問合せ：川崎能典（統計数理研）

E-mail：kawasaki@ism.ac.jp

金融工学関係のセミナー案内

http://homepage2.nifty.com/ism-finance/

※第4回アジア圏計算機統計学会（ARS）中止のお知らせ

先に，お知らせした2001年12月20日～22日にChulalongkorn大学（Bangkok，Thailand）で開催予定の標記の学会は，当大学の都合により，中止の連絡が入り，やむを得ない事情のようで，中止を決めましたので，とり急ぎお知らせします。なお，今後の予定もありません。参加予定の方々に，この不測の結果に恐縮しています。

浅野長一郎（アジア圏世話役）

17　事務局から

17.1　第69回大会講演報告集販売のお知らせ

2001年9月に西南学院大学で開催されました日本統計学会第69回大会の講演報告集を頒布することにしました。事務局宛にメール(jimu@jss.gr.jp)，電話（03-3442-5801），FAX（03-3442-5924），郵便等で請求していただければ，報告集代（3,000円）＋送料（320円）の振込用紙を同封してお送りいたします。また，チュートリアルセミナーのテキストについても同様にテキスト代（1,000円）＋送料（320円）でお送りいたします。ご希望の方は事務局までご連絡ください。

17.2　投稿のお願いとお知らせ

No.109（10月）から編集担当が，瀬尾隆・山口和範に替わりました。

統計学の発展に資するもの，会員に有益であると考えられるものなどについて1,000字以内をめどに原稿をお送りください。

来日統計学者の紹介につきましては，訪問者の略歴，滞在期間，滞在先，世話人などをお寄せ下さい．さらに，求人案内（教官公募）なども受け付けております．また，修士・博士論文の紹介を行っていますので，氏名（及び英文著者名），学位名，取得大学名（専攻名まで），論文タイトル（和文のときは，英文タイトルを併記），主査名（または指導教官）をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿，もしくは，文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

会報記事の投稿は，下記宛てお願いいたします。

原稿送付先

〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学理学部応用数学科　瀬尾　隆宛

Tel：03-5228-8199（直通）

Fax：03-3290-4293（事務室）

E-mail：kaiho@jss.gr.jp

（統計学会広報連絡用e-mailアドレス）

これから一年間の編集担当をさせていただくことになりました。今後の会報の発行予定ですが，No.110（1月），No.111（4月），No.112（7月）を予定しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

退会者

宮川　強，東北電力株式会社（賛助会員）

現在の会員数（2001年 9 月10日現在）

名誉会員	25名
正会員	1357名
学生会員	167名
総計	1538名
賛助会員	21法人
団体会員	3 団体

・**統計関連学会ホームページURL：**
http://www.jss.gr.jp
・**住所変更連絡用e-mailアドレス：**
jjusho@jss.gr.jp
・**広報連絡用e-mailアドレス：**
kaiho@jss.gr.jp
・**その他連絡用e-mailアドレス：**
jimu@jss.gr.jp